様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月１７日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010 ～2012
課題番号：２２７２０１８５
研究課題名（和文）　「朝鮮資料」による中・近世日本語の再現

研究課題名（英文）　A Comparative Approach to the Reconstruction of Medieval and Late Medieval Japanese and Korean in the `Korean Materials`

研究代表者
朴　真完（PARK　JINWAN）
京都産業大学・文化学部・准教授
研究者番号：90441203

研究成果の概要（和文）:「朝鮮資料」の本文中には日本語をハングルあるいは朝鮮字音で記した箇所が多いため、朝鮮語との対照分析を通して中世から近世にかけての文法・音韻・語彙の変遷について記述した。また新資料の発掘にも努め、日本語と朝鮮語の研究資料に資するものとして、対馬の朝鮮語学習書『朝鮮語訳』、日本語通訳官・朝鮮語通事の問答集『惜陰談』、建仁寺両足院所蔵の対朝鮮外交資料などを学界に公表し、その内容を細かく分析した。

研究成果の概要（英文）: Based on the `Korean Materials`, in which there were many Japanese words written in Hanguel or Sino-Korean characters, this research investigates changes in the phonemes, grammar, and vocabulary of Japanese from the 15th century to the 19th century in a comparative analysis. Additionally, a collection of materials are analyzed which contribute to explaining the history of the Japanese language, including a Korean-language textbook for a Korean interpreter (a Japanese) Chosen-go-yaku (朝鮮語訳), a compilation of Korean interpreters' questions and Japanese interpreters' answers Seki-in-dan (惜陰談), and a large corpus of diplomatic data between Japan and Korea in the Kennin-ji(建仁寺).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：日本語史、朝鮮語史、対照言語学、中世日本語、近世日本語、朝鮮資料

１．研究開始当初の背景

(1)「朝鮮資料」は、朝鮮時代司訳院で日本語通訳官を養成するために編纂した教科書、例えば会話教科書『捷解新語』(原刊本 1676 年)、辞書『倭語類解』(1780 年代)など、中・近世日本語に関する教科書類が中心となっている。また日本における朝鮮語通詞教育のために使われた教科書類、『隣語大方』『交隣須知』など近世朝鮮語を反映する文献も多数含まれる。

(2)「朝鮮資料」の研究は、日本語史・朝

鮮語史・文献学という３つの領域に精通する必要があるほど、研究者の層が薄い分野である。中でも「朝鮮資料」の日本語を分析するためには、中・近世日本語のみならず、古代日本語研究も視野に入れつつ、日朝両言語の歴史的な変遷に関する研究を総合的に行う必要がある。

(3)形式面で見ると、「朝鮮資料」は日本語の原文に朝鮮語で翻訳を付ける「対訳」という特殊な形式を取っており、さらに本文はテキストの内容は変えず、日本語の変化がある箇所のみを改訂しているので、両国語の対照分析を通して、日本語と朝鮮語の歴史、特に中・近世語の姿を再現することは勿論、中世から近世までの朝鮮語の歴史的な変遷を把握できる絶好の資料となる。

２．研究の目的

(1)「朝鮮資料」は日本語と朝鮮語が切り離せない状態となっているので両言語の相互干渉は避けられず、「朝鮮資料」の中には正常の表現と干渉を受けた表現が共存しているため、各言語を分析・再現する際には慎重な態度を要する。本研究では、このような「朝鮮資料」の特徴を活用して、両国語史における諸問題を解決することを目的とする。

(2)具体的に言うと、まず日本語と朝鮮語の中・近世語における相違点と共通点を明確にすることによって、中・近世日本語と朝鮮語の特徴を明らかにすることと、両国語の歴史的な変遷における諸問題を解決することを主な目的とする。また日本語と朝鮮語の双方向の影響関係に着目し、歴史的な事柄、文化背景にまで踏み込んで両言語の分析を行う。なお「朝鮮資料」の新たな研究方法にも言及し、言語のみならず文学・歴史研究への活用をも示唆する。

３．研究の方法

(1) 従来「朝鮮資料」の分析から日本語の変遷と言われた内容の中には、実際には朝鮮語の変遷から影響を受けた内容が含まれているが、これは日朝語双方からの干渉を看過した結果である。つまり、歴史的につながりのある日本語と朝鮮語は文法的な類似によって、「朝鮮資料」の日本語は朝鮮語の変遷に導かれやすくなっている。そのため、「朝鮮資料」の日本語と朝鮮語のように依存関係にある二つの言語を歴史的に対照する際には、分析道具としての言語(朝鮮語)の影響を排除したうえで、日本語の変遷を分析・記述してこそ有意義となる。この事実は、「朝鮮資料」が言語類型論・対照言語学という二つの分野から接近すべき資料であることを示唆している。

(2)具体的に言うと、歴史的な観点から日本語と朝鮮語を比較して、その関連性を解明すると共に、共時的な立場から 17 世紀から 18 世紀にかけての両言語を各面にわたって対照する方法が有効である。そのために両国語の中・近世における変化の諸問題を把握し、両国語を徹底的に対照するとともに、両国語の歴史的な変化を対照する時にも、現代語における両国語の対照研究の成果を積極的に活用する。

４．研究成果

(1) 今まで「朝鮮資料」の研究は、主として日本語と朝鮮語の両国語で個別になされ、「朝鮮資料」の価値を生かすことができなかった。これに対して本研究では、日本語史と朝鮮語史の問題、特に両言語の変遷過程における諸問題を念頭において研究を遂行した。そのため、朝鮮語の影響によって生じた日本語の表現に関しても分析を行い、既存研究で看過してきた相互影響や干渉に関する研究も行った。

(2)また日本語と朝鮮語の変遷過程について詳細に分析し、中世から近世にかけての純粋な意味での日本語の変化を的確に把握することに努めた。そのため、本研究では「歴史対照研究」という方法論を援用して、先行研究にはない新たな視点から両国語における中・近世語の再現を試みた。

(3) ２０１０年度においては、まず早稲田大学服部文庫所蔵の『朝鮮語訳』について言語学的検討を行った。具体的にはハングル表記に対する仮名転写表記を分析して「音節対応表」を作成し、おもに母音表記の特徴について調べた。特に二重母音表記の中で、エ段で表記された例に注目した。その様相は語頭よりは非語頭に多く、意味的形態素より文法的形態素でよく現れている。二重母音に対するエ段表記は単母音化を反映する表記として認められるので、『朝鮮語訳』が成立した 18 世紀初期に語頭と非語頭において単母音化が起きていたと言える。

(4)２０１１年度においては、まず薩摩苗代川朝鮮通事の手による『惜陰談』（1803 年以後 1854 年以前成立）について調べた。『惜陰談』は倭館を背景に実際起こった事件を素材にして、日本通事が質問して朝鮮訳官が答

える形式で構成されている。本書は『贅言試集』などの日本語問答集を朝鮮語に翻訳したもので、外交実務の内容はもちろん、私的交流の様子を観察することが可能である。学習書として『惜陰談』の役割は、まず朝鮮語を日本語に翻訳した結果を『贅言試集』の原文と対照する方式で翻訳練習書として使われ、また朝鮮と関わる情報を収集する状況を備えた会話練習書として使われたと考えられる。これらの目的から本書は倭館に居住した朝鮮語通事、あるいは派遣予定の通事のために作成されたものと推定される。

(5)『惜陰談』は当初、対馬島の学習書として使われたが、後に薩摩苗代川に伝わり、現地の朝鮮通事によって再度写された。このように苗代川においても朝鮮語学習が盛んに行われたため、現在、苗代川を出自とする朝鮮語学習書は京都大学（20 種 28 冊）と沈寿官家（8 種 17 冊）に多数伝わる。しかし今まで苗代川朝鮮語学習書の系統に関しては不明な点が多く、いわゆる苗代川本は正確に分類されているとは言いがたい。本研究では筆写者の家門と出身に着目してこの問題にせまり、現地調査の際に入手した家系図と書写記の人名を根拠に、学習書の主な筆写者は苗代川朝鮮通事を歴任した朴家の二家、寿悦家と平覚家であることを確認した。なお苗代川における同一書名の学習書に違う内容が含まれる現象については、当時の朝鮮通事教育は主に家門別に行われていたためと解釈した。例えば沈寿官家所蔵本『交隣須知』の二本、文政本と天保本の場合、天保本は京都大学所蔵本と同様「平覚系」に、文政本は「寿悦系」に分類されるが、両者の間には日本語・朝鮮語の記述内容はもちろん、部門立てなどの形式面における相違点が多数確認される。

(6)２０１２年度においては、『捷解新語』の否定文を始め、「朝鮮資料」全般における否定表現の特徴を分析した。「朝鮮資料」の否定文を見ると、朝鮮語の否定素（NEG）は用言の後に来ることが極めて多い。当時朝鮮語の否定文には、NEG が用言の前に現れる短形否定文と、NEG が用言の後に現れる長形否定文が共存しており、朝鮮国内文献内での出現比率はそれぞれ半分ずつ占めている。当時日本語の NEG は専ら用言の後に現れることから考えると、以上の様相は、対訳文(朝鮮語)が原文(日本語)の影響を受けた結果と判断される。

(7)また建仁寺碩学僧が作成した唱和集を分析し、その内容を通じて、碩学僧は宗教活動や外交活動のほか、文芸活動にも積極的に取り組んでいたことを確認した。唱和集は碩学僧と朝鮮通信使による文化交流の重要な一面を示すものである。両足院所蔵の詩集三編『朝鮮国三使詩集』『鮮人贈答詩』『朝鮮人紀行』を分析した結果、日朝外交の場において漢詩唱和は、主に日朝知識人の親交の手段として活用されたことが分かった。漢字文化圏の教養人に近づこうとしていた碩学僧は朝鮮通信使の漢詩を写して学習に活用していた。その過程で相手国の言語、すなわち日本語の仮名や、朝鮮語の口訣・ハングルについて関心を示すようになっていた。一方、朝鮮通信使一行は和語を韓国字音、あるいはハングルで表そうとした。これらの記録は相手国の言語を学習した根跡と見なせる。つまり、両国の知識人が互いの言語を理解しようと努力し、さらに固有語による意思疎通を図っていたと理解できる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①朴 真完「『捷解新語』否定表現の対訳問題」『訳学と訳学書』3、2012、pp.219-246（査読あり）
②朴 真完「苗代川朝鮮語学習書の系統再考」『韓国語学』54、2012、pp.171-207（査読あり）
③朴 真完「苗代川本『惜陰談』について―朝鮮語学習書としての性格を中心に」『韓国語学』52、2011、pp.121-148（査読あり）
④朴 真完「『朝鮮語訳』における母音表記の考察」『韓国語学』48、2010、pp.131-155（査読あり）

〔学会発表〕（計７件）
①朴 真完「『三学訳語』の日本語に関する考察―引用書との関係を中心に」、日本文化研究所第一回日韓合同フォーラム、2012 年 10 月 18 日、京都産業大学
②朴 真完「苗代川本『対談秘密手鑑』について」、第 4 回訳学書学会国際学術会議、2012 年 7 月 29 日、徳成女子大学校（韓国）
③朴 真完「『三学訳語』の日本語採録過程の考察―引用書との関係を中心に」、第 3 回訳学書学会国際学術会議、2011 年 7 月 30 日、京都大学
④朴 真完「建仁寺両足院の朝鮮通信使関連資料について」、京都産業大学世界問題研究所・韓国東北亜歴史財団・合同学術セミナー、2010 年 10 月 10 日、京都産業大学
⑤朴 真完「朝鮮後期における日朝通訳官の交流―惜陰談の分析を通じて」、第 3 回奎章閣韓国学国際シンポジウム、2010 年 8 月 27 日、奎章閣（韓国）

⑥朴 真完「『捷解新語』の対訳方式―否定表現を中心に」、第 2 回訳学書学会国際学術会議、2010 年 8 月 13 日、高麗大学校
⑦朴 真完「『朝鮮語訳』における母音表記の考察―二重母音を中心に」、東アジア日本学会 2010 年国際学術大会、2010 年 5 月 1 日、清洲大学校（韓国）

〔図書〕（計２件）
①朴 真完『「朝鮮資料」による中・近世語の再現』、臨川書店、2013、pp.1－431
②朴 真完（他 10 人、共著）『鏡の中の自己認識―日本と韓国の歴史・文化・未来』（第六章：建仁寺両足院の朝鮮通信使関連資料について）、御茶の水書房、2012、pp.163－184

６．研究組織

(1)研究代表者
朴　真完（PARK　JINWAN）
京都産業大学・文化学部・准教授
研究者番号：90441203